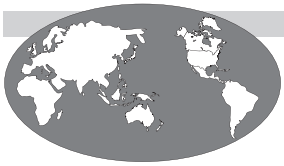


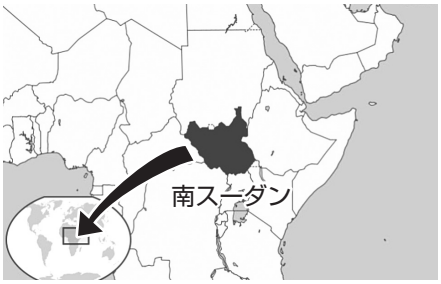
世界を知る It knows the world.

このページは世界を知るをテーマに「国際協力」については、独立行政法人国際協力機構（JICA）デスク熊本のご協力を得て、日本で生活する私たちには日常知ることができない興味深い世界の状況を紹介します。

世界で最も新しい国～南スーダン共和国

～2012年4月　アフリカの南スーダンを訪問しました～

JICA国際協力推進員　木下（きのした） 俊和（としかず）さん



2011年7月9日に旧スーダン共和国の南部10州がアフリカ54番目の国として独立した。もともと「スーダン」とは、アラビア語で「黒い人々」という意味で、現在のチャド、スーダン、中央アフリカなどの広い範囲を指していた。スーダンは1956年にイギリスから独立したが、1955年以来内戦状態となり、1973年から1983年までの10年間を除き、アフリカで最も長い内戦状態にある国として知られる。2005年に和平合意が締結され、内戦は終結、南部スーダンの独立にいたったが、現在もスーダン、南スーダン両国国境付近では、戦闘が続いている。

両国を訪れた第一印象は、スーダン=アラブ、南スーダン=アフリカと、明らかに異なる国であるという印象であった。スーダン人のほとんどは、ムスリムであり、街中のいたるところにモスクがあり、定時にはコーランが流れ、飲酒、アルコールの持ち込みは完全に禁止となっている。一方、南スーダンでは、クリスチャンが多く、飲酒も可であった。

そもそも、スーダン内戦の原因は、アラブ人とアフリカ人（厳密には多くの人種が共存状態にある）という、民族紛争または、部族紛争であったものが、石油が発見されたことによってさらに事情が複雑化したものだろう。

この誕生して間もない国・南スーダンは、国際機関や多くの国々の支援を受け復興を行っているが、あまりに長い内戦が多くの問題を残した。例えば、社会基盤の崩壊である。首都のジュバでさえ、多くの道路が舗装されていない。水道はなく、水は川からの給水に依存している。南スーダンの電気の普及率はわずか2%である。経済も人材が育っておらず、多くの民間企業は隣国のウガンダやケニアからの人々によって営まれている。また、国家財政の92%を石油に依存しており、産業がなく雇用がないといった状態である。現在、社会基盤の整備、初等教育や職業訓練といった人材育成、また、看護師、助産師育成による保健医療といった国民生活を向上させるのに必要な復興事業を一歩一歩進め始めているところである。

上空から見た南スーダンは、緑豊かな大地と肥沃な国土に恵まれているように見える。現在の国状は確かに厳しい状態にあるが、一方で復興に必要な潜在能力にも恵まれた可能性のある国である。国境付近でのスーダンとの紛争は懸案事項であるが、今後の南スーダン、また、そこに住む人々の安定した生活を願うものである。